# 青年期における性役割観と自尊心との関連
## －両親の養育態度への認識内容からの検討－

# The Relationship of Sex-Role Characteristics to Self-Esteem and Parental Bonding Measures in Adolescence

柴　山　　直*・新　井　真由美**
SHIBAYAMA Tadashi & ARAI Mayumi

## 問題と目的

現代社会の特徴の一つとして，あらゆる面で，女性の社会進出・参加の動きが進んでいることが指摘できる。それに伴い，男女の性役割観にも著しい変化がみられるようになった。性役割とは，男・女という性別に対して社会が期待する行動様式・態度・パーソナリティー特性といった役割期待（柏木，1973），すなわち，いわゆる男らしさ・男性性（masculinity），女らしさ・女性性（femininity）をさす。

これまでの「男は仕事，女は家事・育児」という伝統的性役割観は，男女とも1990年代に入り大きく変わってきた（総理府，2000）。伝統的性役割観を支持する女性は，1980年代までは4割弱いたが，2000年には21％にまで減少し，逆に支持しない女性が54％と半数を超えた。他方，男性も伝統的性役割観を支持する比率が一貫して女性より高いものの，1980年代までは支持する男性が50％以上いたが，2000年には30％にまで減少し，逆に支持しない男性が42％になった。性役割観には世代差もみられるが，特に若い世代で伝統的性役割観を支持しない者が多い。

しかし，現在でも家庭では，女性がいわゆる専業主婦であろうと共働きであろうと，相変わらず家事・育児・介護のほとんどが女性によって分担されている（総務庁統計局，2002）。そして，渡邊ら（1997）の研究によると，大学生の日常行動にも，同様の性役割分担が染み込んでいるという。特に，異性の友人と行動する場面では，同性の友人との場面より，女子は女らしく，男子は男らしく行動する傾向がある。すなわち，女子は自分のおしゃれ・物を片付ける・お弁当を作るなどの伝統的女性役割行動を，男子は相手を座らせる・重い荷物を持つ・お茶をおごるなどの伝統的男性役割行動をとる。このように，青年男女の異性とつきあう場面の行動には，今でも伝統的性役割が強く染み込んでいるのである。

さらに，大学生の理想のパートナー像にも伝統的性役割が色濃く生じ，男子は女子に女子自身が理想とする以上に女性性を，女子は男子に男子自身が理想とする以上に男性性を強く期待している（渡邊，1996）。これらの結果は，若い世代でも，伝統的性役割行動や伝統的性役割観が，特に家庭場面や対異性場面といった個人的レベルで今なお根強いことを示している。

Bem（1974）は，個人における男性性と女性性の統合である心理的両性具有性を提唱し，これまでこのタイプが社会的な適応にも優れ，また心理的な健康度も高いことを指摘した（Bem，1975）。その理由として，心理的両性具有性が，社会において男性的とされるパーソナリティー特性を自己概念として持ち（男性性），かつ女性的とされるパーソナリティー特性も自己概念として持つ（女性性）ことで，

2004．7.12　受理
*新潟大学教育人間科学部教育科学講座
**新発田市教育委員会主事

男女にかかわらず，本来人間として備えるべき人格特性を幅広く自己概念として具有していることをあげている。

しかし，わが国のように今なお根強い性役割社会では，男女とも異性の性役割を身につけることは容易ではないと考えられる。そのような現状で，若者は性役割，すなわち男らしさ・女らしさについて，どのような認識をもっているのだろうか。そして，理想と現実の狭間の中で，性役割に関する自分の理想の姿と，現実に自分が身につけている程度（自己評価）に何らかの“ずれ”を感じてはいないだろうか。この心理的“ずれ”が性役割葛藤となり，若者の自尊心に影響を及ぼしているのではないかと考える。

ところで，自尊心には，「自分自身を有能，有意義，成功的，価値のある者と信ずる程度」「自分自身を尊敬し，価値ある人間であり，これでよいと受容している程度」「他者の視線を常に気にする社会的不適応感の程度」といった自己評価，自己受容，社会的適応・不適応などの要素が含まれている（井上，1992）。自尊心については多くの考え方があるが，少なくとも現在の定義には，自己が価値ある存在であるという，全体としての自己に関する肯定的感情・評価・受容が主要な要素として共通に含まれている。

わが国はアメリカとは対照的に自尊心に著しい性差がみられ，明らかに男子・男性の自尊心の方が女子・女性より高い（蘭，1985他）。自尊心は，自己を独立的自己と他者関連的自己という2つの側面から捉えるとき，両者を包含する自己確立の核となるものであろう。その自尊心が，早くも小学校高学年のころから男子より女子の方が低くなり，性差が顕在化し，その後さらにその性差は大きくなっているのである。

これまで，多くの研究で男性・女性の自尊心の根には性役割があると指摘されてきている。たとえば，柏木・岡崎（1994）は，男性の自尊心が女性よりも高いという著しい性差がある一方，専業主婦と有職女性には差がないわが国の背景には，根強い伝統的性役割があると指摘した。わが国の性役割研究，例えば渡邊（1998）では，1970年ころまで生物学的性別に合致した「男（女）らしさ」がよしとされる「性役割期待一致モデル」が有力であったが，その後は多次元的な考え方が主流となっているという。成人女性の場合，自尊心と性役割観の関係のしかたには，専業主婦か有職女性かによる違いはなく，いずれでも自尊心は明らかに男性性および性別にかかわらず男女ともに社会から期待される特性である「ヒューマニティ」と強く関係しており，女性性とは関係がない（岡崎，1994）。すなわち，成人女性については，仕事をもつ・もたないにかかわりなく，男性性やヒューマニティを重視する者ほど自尊心が高いが，女性性を重視するからといって，自尊心が高いとは限らないのである。この傾向は，大学生男女でも成人女性とほぼ同様である（渡邊，1996）。

また，女子大学生の自尊心は，理想の自己や理想の異性のあるべき姿をどのように考えるか，という性役割観によって，自尊心に差がある（渡邊，1996）。すなわち，女子大学生のなかで最も自尊心が高いのは，理想の自己像として男性性を，理想のパートナー像として女性性を重視する非伝統的タイプであり，最も自尊心が低いのは，理想の自己像として女性性を，理想のパートナー像として女性性を重視する矛盾タイプである。他方，男子大学生の自尊心は，理想のパートナー像にかかわりなく，理想の自己像として男性性を重視する伝統的タイプの方が，そうでないタイプより高いのである。これは，男女の自尊心を考える上で，非常に興味深い結果であろう。つまり，男子は社会的に評価の高い男性性を自分の中に取り入れられるかどうかが直接自尊心の高さに結びつく。しかし女子の場合は，単に女性性を身に付けたからといって自尊心が高くはならない。社会的に評価を受けることの少ない女性性は，自尊心を高めることはせず，むしろマイナスの方向にしか作用しないのかもしれない。例えば，女性性を持たない女性に対してしばしば言われる“女らしくない”という言葉が，女性の自尊心を低めている可能性もある。そのような背景を踏まえて見てみると，女性で最も自尊心の高い非伝統的タイプというのは，現実の自己として女性性を持ちつつさらに男性性の獲得をも目指し，パートナーにも異性の性役割を身に付けて欲しいと願う両性具有性志向の者だと考えることができる。

一方，性役割葛藤と自尊心も全体としては男女とも負の相関があり，特に男女とも男性性・ヒューマニティにおける性役割葛藤が大きいほど自尊心は低い（渡邊，1996）。女子では，さらに女性性における葛藤が自尊心を低めている。大学生の男女ともに，「性役割についての混乱，怒り，矛盾」を感じる性役割葛藤が大きいほど自尊感情は低いというデータもある（佐藤・斎藤，1994）。

このように，性役割に関する認識はその個人の行

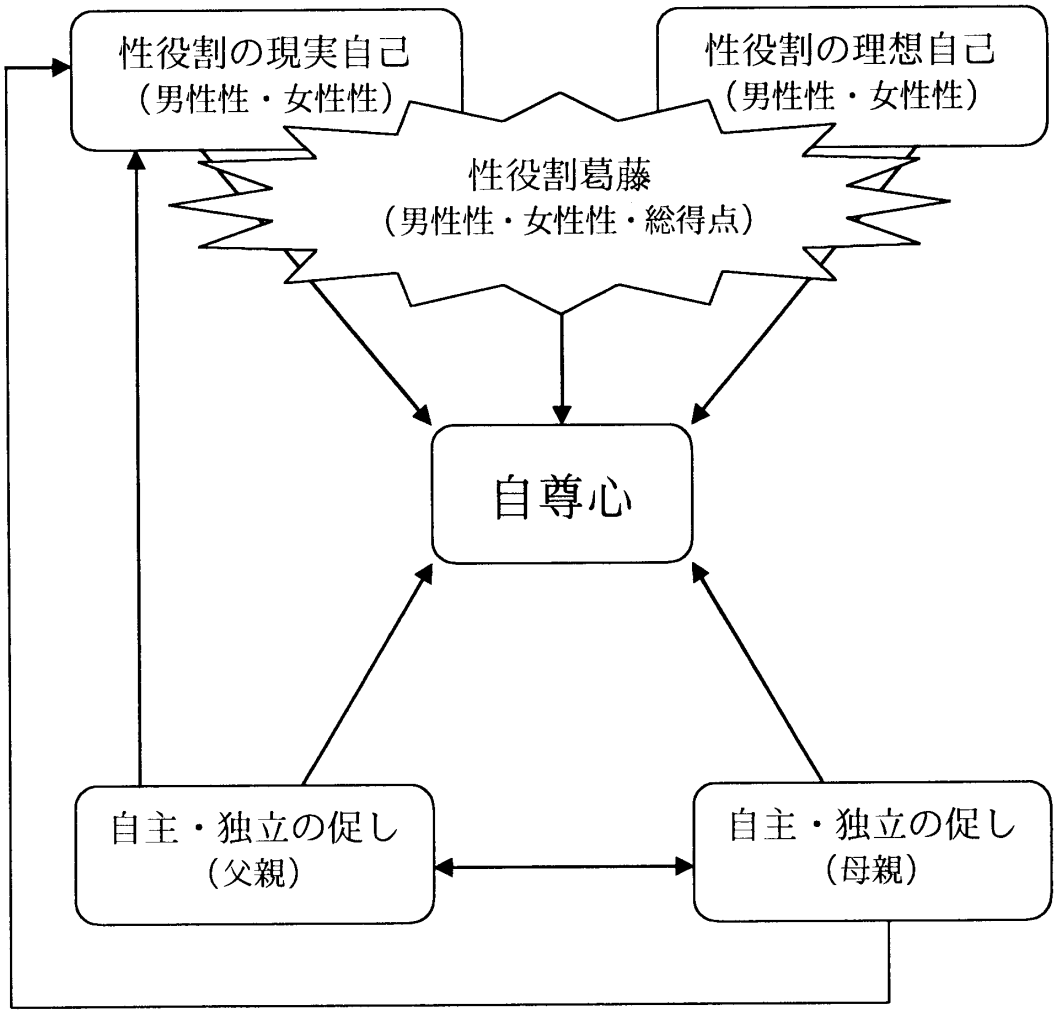



**図１　自尊心に影響を与える諸要因の関係図**

動や意識に大きく影響し，時には自己の性役割観と社会の性役割観との対立や違いから，個人を苦しめることもあるだろう。では，この性役割観はいかにして形成されるのであろうか。その要因には，家庭や学校・メディアといった個人を取り巻く環境すべてが何らかの形でかかわっていると思われる。しかし，伊藤（1980）が，両親の養育態度や性別化期待が，青年期後期にある女子の職経歴選択に大きく反映されることを指摘しているように，子どもにとって，日々の親とのかかわりから受ける影響は非常に大きいはずである。両親の養育態度に代表される生育環境の違いにより，その後の性役割観も異なるのではないだろうか。たとえば，幼い頃から心理的自立を促されたり，行動の自由が与えられたりしていた者は，青年期においてもより男性性を重視するようになると考えられる。また逆に，常に自主・独立を否定され，何かと過保護に育てられてきた者は，男性性に対する葛藤が強いのではないかと思われる。そして，この両親の養育態度そのものも，子どもの自尊心に直接影響を与えているであろう（図１参照）。

そこで本研究では，比較的男女平等の環境にあると思われる大学生を対象とし，まず，現代の大学生が性役割に関してどのように認識しているのかを，自己像（現実自己），理想の同性像（理想自己）の２側面から探る。これまで，多くの研究で用いられてきた男性性と女性性を測定する尺度は，形容詞による性格特性語によるものであった。しかし，小出（1999）は従来の形容詞の性格特性語による尺度は性別との対応関係が高くなく，このことは現代日本において性格特性によって性差を論じること自体，

意味をなさなくなっていることを指摘している。本研究では，形容詞による性格特性語によらず，行動や意識による項目から作成された，より性別との対応関係の高い尺度を用いる。そして，自尊心そのものに性差があるのか，また，性役割タイプ（両性具有型・男性型・女性型・未分化型）や性役割葛藤と自尊心との関連性を明らかにし，その性差についても検討する。さらに，両親の養育態度への認識内容が，大学生の性役割観や自尊心に及ぼす影響についても検討することを目的とする。

## 方　法

新潟大学の学生を対象に，授業時間中に質問紙を配布し，集団で実施した。被験者は290名，その内訳は男子143名，女子147名である。調査は2003年11月上旬に行った。なお，質問紙の構成は下記の通りである。

(1)　性役割観

小出寧（1999）によるジェンダー・パーソナリティー・スケールから「男性性尺度」15項目，「女性性尺度」14項目のみ抽出して用いる。この尺度は，形容詞による性格特性語によらず，行動や意識による項目から作成されており，男性性尺度，女性性尺度，女性のセックス・アピール尺度の３下位尺度より構成される。尺度の構成概念は，男性性は「社会通念上，男らしいとされる行動や意識をどの程度，有しているかを表す概念」と定義され，女性性は「社会通念上，女らしいとされる行動や意識をどの程度，有しているかを表す概念」と定義される。

ここで，男らしさ・女らしさに関する自己認知を明らかにするという目的から，「あなた自身」（現実自己），「理想と思う同性のあり方」（理想自己）の２側面について評定を求めた。評定は，「かなりあてはまる（６）」から「全くあてはまらない（１）」までの６段階である。なお，現実自己と理想自己の質問は，呈示順序による影響を考慮し，被験者半数で回答順序を入れ替えた。

(2)　性役割葛藤

男らしさ・女らしさの認知における現実自己と理想自己のギャップを，伊藤（1978）のギャップ得点の操作的定義にしたがって，上記尺度の理想自己スコアと現実自己スコアの差の絶対値をもってギャップ（葛藤）得点とした。

(3)　自尊心

Rosenberg（1965）のSelf Esteem尺度のうち10項目を，山本・松井・山成（1982）が邦訳したものを用いた。尺度によりそれぞれ自尊感情の捉え方は異なっているが，Rosenberg（1965）は，他者との比較により生じる優越性や完全性の感情ではなく，自分が設定した価値基準に照らした自己への受容，好意，尊重を評価する程度のことを自尊感情とした。つまり，自身を「非常によい（very good）」と感じることではなく，「これでよい（good enough）」という自分なりの満足感を感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えている。逆に，自尊感情が低いということは，自己に対する拒否，不満足，軽蔑を表し，自己への尊敬を欠いていることを意味する。評定は，「あてはまる（５）」から「あてはまらない（１）」までの５段階であった。

(4)　両親の養育態度への認識内容

Parkerら（1979）が作成したParental Bonding Instrument（PBI）を小川（1991）が邦訳したものから「過保護項目」13個のみ抽出して用いた。この尺度は，養護因子（care factor）と過保護因子（overprotection factor）の２つの主要因子を，測定し数量化するための，子どもからみた親の養育態度の自覚的評価スケールである。質問紙の項目数の関係上，より性役割観や自尊心に関連が強いと思われる，過保護因子のみを使用することにした。過保護項目では，操縦（control），侵入（intrusion），過剰接触（excessive contact），幼児扱い（infantilization），自立的行動の妨害（prevention of independent behaviour）などの度合いを通して，逆の意味で自立や独立を促すことの度合いを計っている。両親のさまざまな態度や行動の各質問に，自分が16歳までの父親・母親それぞれについて，覚えている通りに回答してもらった。評定は，「非常にそうだ（３）」から「まったく違う（０）」までの４段階であった。

## 結果と考察

### １．性役割観

(1)　現実自己の認知

ジェンダー・パーソナリティー・スケールにおいて測定した，性役割の現実自己（あなた自身にどの程度あてはまるか）の性差を項目別，尺度別にｔ検定で分析した。まず，項目別性差（図２，３）を見ると，29項目中21項目で有意な性差がみられた。男性性項目で有意な性差が見出されたのは，項目３・

11・13・26（p<.001），12・18・21・28（p<.01），14・22（p<.05）の計10項目，女性性項目で有意な性差が見出されたのは，項目5・10・16・20・25・27・29（p<.001），8・23・24（p<.01），6（p<.05）の計11項目であった。なお，女性性項目2「結婚するとしたら，相手次第で幸せになれるか決まる」を除く全ての項目について，男性性項目では男子のほうが女子より平均が高く，女性性項目では女子のほうが男子より平均が高かった。

次に，尺度別の性差を見ると，男性性1項目あたりの平均は，男子3.87，女子3.37と女子より男子が有意に高く（p<.001），女性性1項目あたりの平均は，男子3.27，女子4.08と男子より女子が有意に高かった（p<.001）。また，男女とも自己の性に合致した性役割のほうの平均が高く，男性性に比べ，女性性における男女間の平均の開きが大きい。

(2) 理想自己の認知

理想自己の認知は，同じジェンダー・パーソナリティー・スケールにおいて，「理想と思う同性のあり方」という設定で質問した。まず項目別性差について見てみると，29項目中15項目で有意な性差が見出された。男性性項目で有意な性差が見られたのは，項目3・13・26（p<.001），1・14・22（p<.01），4・12・28（p<.05）の計9項目，女性性項目で有意な性差が見られたのは，項目5・20・25・27（p<.001），10・16（p<.01）の計6項目であった。いずれも男性性項目では女子より男子のほうが平均が高く，女性性項目では男子より女子のほうが平均が高かった。しかし，男性性項目7「将来，何かと過剰な責任がのしかかり荷が重いと思う」，女性性項目2「結婚するとしたら，相手次第で幸せになれるか決まる」，女性性項目15「育児に向いていろような気がする」では，有意ではないが性差が逆転していた。

次に，尺度別の性差を見ると，やはり男性性1項目あたりの平均は，男子4.11，女子3.71と男子のほうが有意に高く（p<.001），女性性1項目あたりの平均は，男子3.54，女子4.01と女子のほうが有意に高かった（p<.001）。また，現実自己と同様，理想自己においても男子は女性性より男性性の平均のほうが高く，女子は男性性より女性性の平均のほうが高い。しかし，男性性・女性性ともに，現実自己よりも男女間の平均の開きは少なくなっている。

(3) 現実自己と理想自己のギャップ

ジェンダー・パーソナリティー・スケールで測定した現実自己と理想自己の結果から，各個人の現実自己と理想自己のギャップを性役割葛藤として分析した。ギャップ（葛藤）得点には，伊藤（1978）の操作的定義にならい，項目ごとの理想自己スコアと現実自己スコアの差の絶対値の合計得点を用いた。

男性性における葛藤，女性性における葛藤，全体的な葛藤（総得点）のそれぞれについて，1項目あたりの平均の性差を見たところ，いずれにおいても男子のほうが女子よりも有意に葛藤が大きかった（男性性葛藤，葛藤総得点，p<.001，女性性葛藤，p<.01）。

## 2．自尊心

自尊感情尺度10項目の合計得点の性差をt検定により分析した。平均（SD）は，男子31.52（7.97），女子30.36（6.67），t＝1.34でやや男子が高いものの，有意な性差は見られなかった。

ここで，自尊心の合計得点の分布および分散を見てみると，女子より男子の方が四分位範囲が大きく（男子9.5，女子8.0），分散も男子の方が有意に大きかった（男子63.58，女子44.49，F＝4.03，p<.05）。また，男子の分布の型は最頻値以外にも小さな山ができており，その結果男子の分散が大きくなっているものと思われる。さらに，女子は中央値付近に多く集中しているのに対し，男子は自尊心が極端に低い者や極端に高い者の割合が女子に比べて大きい。特に男子の場合，自尊心の高得点者が多数存在する。

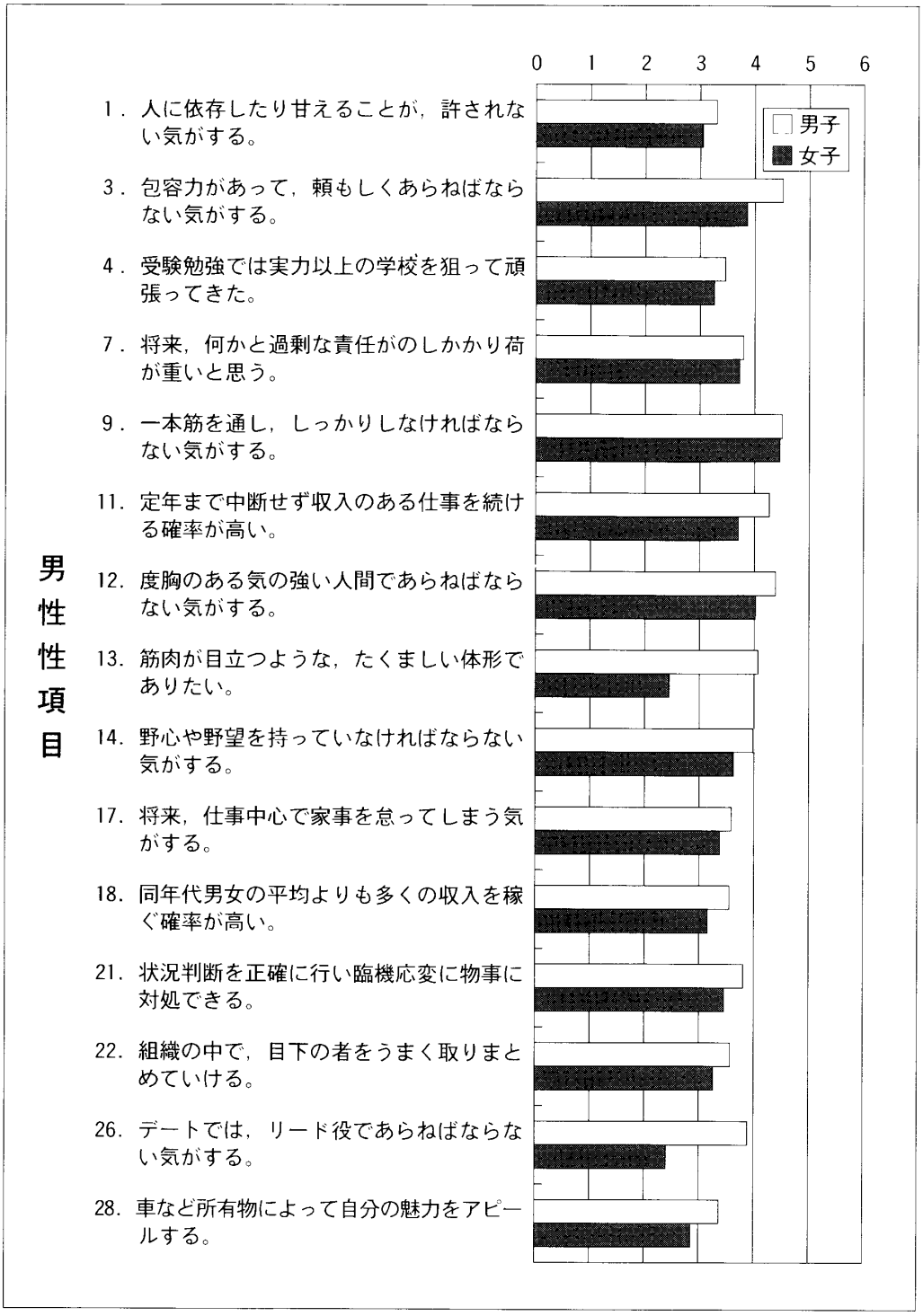
## 3．両親の養育態度への認識内容

父親からの自主・独立の促しに対する認識について，t検定で性差を分析した。平均（SD）は，男子27.87（5.74），女子28.06（6.29），t＝−0.26でやや女子が高いものの，有意な性差は見られなかった。母親からの自主・独立の促しに対する認識について，t検定で性差を分析した。平均（SD）は，男子25.81（6.27），女子26.26（6.57），t＝−0.59でやや女子が高いものの，有意な性差は見られなかった。

## 4．性役割タイプ

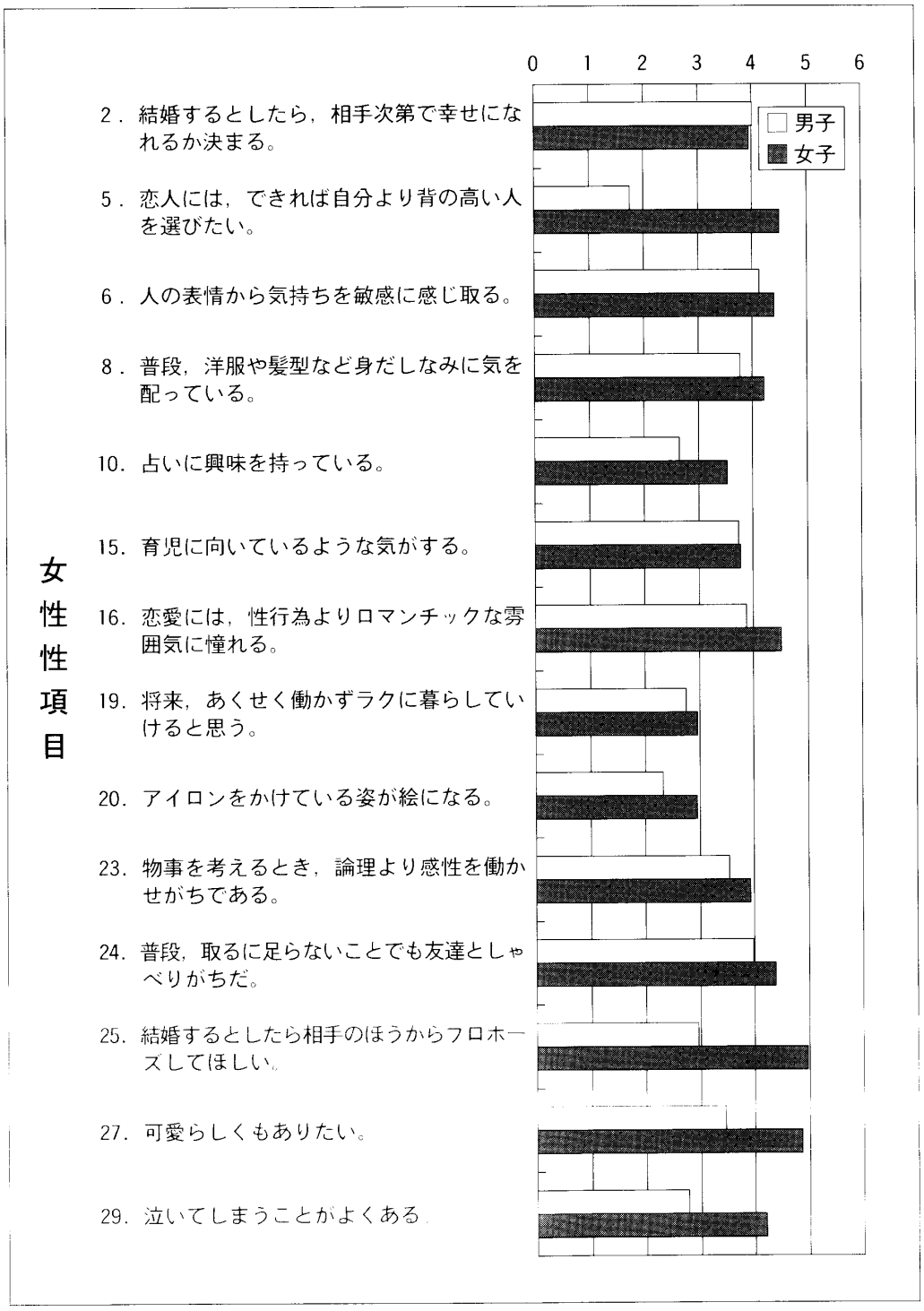
(1) 性役割タイプの分類

ここでは，性役割の現実自己の結果に基づき，被験者を両性具有型・男性型・女性型・未分化型の4タイプに分類して分析を行う。男性性得点と女性性得点のそれぞれについて，中央値（男性性得点54，女性性得点51）により分割し，男性性高群・女性性




注）評定は自分自身について「1：全くあてはまらない」から「6：かなりあてはまる」までの6段階

**図2　性役割の現実自己（男性性）**




注）評定は自分自身について「1：全くあてはまらない」から「6：かなりあてはまる」までの6段階

図3　性役割の現実自己（女性性）

高群を「両性具有型」，男性性高群・女性性低群を「男性型」，男性性低群・女性性高群を「女性型」，男性性低群・女性性低群を「未分化型」とした。

タイプ別・男女別分布に関するカイ二乗検定の結果，$\chi^2$値は130.09，p＜.001で有意差があった。各々のカテゴリーについて，男女別に該当者の出現率を計算したところ，男性は，両性具有型：19%，男性型：56%，女性型：４%，未分化型：21%，女性は，両性具有型：26%，男性型：６%，女性型：57%，未分化型：11%であった（表１参照）。すなわち，男子では男性型が最も多く，ついで未分化型，両性具有型が多い。また，女子では女性型が最も多く，ついで両性具有型，未分化型が多い。そして男女とも，異性の性役割タイプの者はごく少数である。

(2)　性役割タイプ別分析

自尊心，父親・母親の自主・独立の促し，性役割葛藤（男性性・女性性・総得点）の各々について，一元配置の分散分析により平均差を見たところ，いずれも有意な結果は得られなかった。

## ５．性役割観と自尊心との関連

(1)　性役割の現実自己と自尊心

性役割の男性性・女性性２尺度における現実自己と自尊感情尺度における総得点との相関を求めたところ，男女とも有意な相関関係は見られなかった（表２参照）。ただ，有意ではないものの，男性性は男女とも自尊心とわずかに正の相関関係にあったが，女性性は女子にとっては自尊心とわずかながら負の相関関係にあった。

(2)　性役割の理想自己と自尊心

性役割の男性性・女性性２尺度における理想自己と自尊感情尺度における総得点との相関を求めたところ，男子の女性性と自尊心のみ有意な負の相関関係にあった（r＝－.22，p＜.01）。すなわち，男子は理想自己の女性性が高い者ほど，自尊心が低くなる傾向にある。また有意ではないが，男女ともの理想自己の男性性と自尊心との関連や，女子の理想自己の女性性と自尊心との関連もわずかに負の相関関係にあった。

(3)　性役割葛藤と自尊心

性役割の現実自己と理想自己のギャップ総得点と自尊心総得点との相関を求めたところ，男子はr＝－.27（p＜.01），女子はr＝－.18（p＜.05）となり，男女とも有意な負の相関関係にあった。また，尺度別相関では，男子は男性性の葛藤，女性性の葛藤ともに有意な負の相関関係にあり（前者r＝

**表１　性役割タイプの分類**

| | 分類基準 | 男子 | 女子 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| タイプ | M得点　F得点 | 140名 | 145名 | 285名 |
| 両性具有型 | 54≦M　51≦F | 27名<br>(19%) | 37名<br>(26%) | 64名<br>(22%) |
| 男性型 | 54≦M　51＞F | 79名<br>(56%) | ９名<br>(６%) | 88名<br>(31%) |
| 女性型 | 54＞M　51≦F | ５名<br>(４%) | 83名<br>(57%) | 88名<br>(31%) |
| 未分化型 | 54＞M　51＞F | 29名<br>(21%) | 16名<br>(11%) | 45名<br>(16%) |

**表２　性役割観と自尊心との相関**

| | | 現実自己 | | 理想自己 | | 性役割葛藤 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 男性性 | 女性性 | 男性性 | 女性性 | 男性性 | 女性性 | 総得点 |
| 自尊心 | 男子 | .14 | .05 | －.15 | －.22** | －.27** | －.24** | －.27** |
| | 女子 | .04 | －.02 | －.08 | －.08 | －.15 | －.19* | －.18* |

注）＊＊は１%水準，＊は５%水準で有意（以下図表中表記は同じ）

－.27，p＜.01，後者r＝－.24，p＜.01)，女子は女性性の葛藤のみ有意な負の相関関係にあった（r＝－.19，p＜.05)。すなわち，男女とも現実自己と理想自己のギャップが大きい者ほど自尊心が低く，特に男子は男性性における葛藤が，女子は女性性における葛藤がより自尊心の低さとかかわっている。このことから，男子と女子では，自尊心と関連する性役割の自己認知の側面が異なっており，両者とも自己の性での葛藤がより自尊心に影響していることが分かる。

## 6．両親の養育態度への認識内容と性役割観との関連

(1)　父親の自主・独立の促しと現実自己

父親の自主・独立の促しと性役割の現実自己との総得点の相関を求めたところ，表3に示すように男子の父親の自主・独立の促しと現実自己の女性性のみ有意な負の相関関係にあった（r＝－.20，p＜.05)。すなわち，男子は父親から自主・独立を多く促されたと認識している者ほど，現実自己における女性性が低いといえる。一方，男性性とは有意な相関がないことから，父親の自主・独立の促しが，特に男性性の高さとは結びついていないことが分かる。また，女子の場合は，父親の自主・独立の促しが現実自己における男性性や女性性とは関連していない。

さらに，父親の自主・独立の促しと性役割の理想自己や性役割葛藤とも相関をとってみたが，男女とも有意な結果は得られなかった。

(2)　母親の自主・独立の促しと現実自己

母親の自主・独立の促しと性役割の現実自己との総得点の相関を求めたところ，男女とも有意な相関関係は見られなかった。この結果から，母親の自主・独立の促しは，特に現実自己における男性性や女性性の高さとは結びついていないことが分かる。

さらに，母親の自主・独立の促しと性役割の理想自己や性役割葛藤とも相関をとってみたが，男女とも有意な結果は得られなかった。

(3)　父親と母親の養育態度の関連

各個人の父親と母親それぞれの自主・独立の促し度合いに関連があるか相関をとってみたところ，男女とも有意に高い正の相関関係が見られた（男子r＝.62，p＜.01，女子r＝.60，p＜.01)。すなわち，各個人において，父親から自主・独立を強く促されたと認識している者ほど，母親からも同じように自主・独立を強く促されたと認識している。このことから，家庭内である程度，両親の養育態度が統一されていることがうかがえる。

## 7．両親の養育態度への認識内容と自尊心との関連

(1)　父親の自主・独立の促しと自尊心

父親の自主・独立の促しと自尊心との総得点の相関を求めたところ，女子のみ有意な正の相関関係が見られた（r＝.21，p＜.05)。すなわち，女子は，父親から自主・独立を強く促されたと認識している者ほど，高い自尊心をもつことができると考えられる。また，男子も有意ではないものの，同じように父親の自主・独立の促しと自尊心には，正の相関関係があった（表4参照)。

(2)　母親の自主・独立の促しと自尊心

母親の自主・独立の促しと自尊心との総得点の相関を求めたところ，男女とも有意な正の相関関係が見られた（男子r＝.19，p＜.05，女子r＝.18，p＜

表3　両親の養育態度への認識内容と性役割観との相関

| | 父親の自主・独立の促し | | 母親の自主・独立の促し | | 父親と母親の養育態度 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 男性性 | 女性性 | 男性性 | 女性性 | |
| 男　子 | －.05 | －.20* | .08 | －.14 | .62** |
| 女　子 | －.08 | －.09 | －.12 | －.05 | .60** |

表4　両親の養育態度への認識内容と自尊心との相関

| | | 父親の自主・独立の促し | 母親の自主・独立の促し |
|---|---|---|---|
| 自尊心 | 男子 | .14 | .19* |
| | 女子 | .21* | .18* |

.05)。すなわち，男子も女子も，母親から自主・独立を強く促されたと認識している者ほど，高い自尊心をもつことができると考えられる（表4）。

## 結　論

本研究は，現代の大学生が性役割に関してどのように認識しているのかを，現実自己・理想自己の2側面から分析し，それと自尊心や両親の養育態度への認識内容との関連を検討することを目的とした。分析結果は図4に示すように整理できるであろう。図4およびこれまで検討してきたことからも明らかなように，現実自己においても理想自己においても，男性性は男子の方が，女性性は女子の方が明らかに高く，また男女とも自己の性での性役割をより重視していた。これは，伊藤（1978）による「MFHスケール」を用いた渡邊の研究（1996）で，男らしさ・女らしさ・ヒューマニティーの項目および尺度でほとんど性差が見られなかったのとは異なる結果である。すなわち，形容詞による性格特性語では，「従来のような伝統的男らしさ・女らしさ，男性・女性という生物学的性（セックス）にこだわらなくなっている可能性が大きく，自己の性役割の認知は明らかに変化している」（渡邊，1996）といってもよいが，今回のように実際の行動や意識で見てみると，やはり男子は社会通念上男らしいとされる，また女子は社会通念上女らしいとされる行動や意識をより多く有していることが分かる。

しかし，理想自己では，男子が男性性も女性性もより高く望んでいるのに対し，女子は男性性のみ高く望み，女性性はむしろ現実自己よりやや低くなっている。女子にとっての女性性は，日常的に必要で身に付けてはいるものの，さらに強く望みたいと思うものではないのかもしれない。一方，男子は男性性のみならず，女性性も今以上に身に付けたいと思っており，これは最近の「男女共同参画社会基本法（1999年公布）」をはじめとする行政面での男女平等意識の公認や，マスメディアによる多様な男女のあり方等の提供を反映しているものと思われる。現代の男子大学生が理想とする男性像は，従来の男らしさに加え，育児ができ，洋服や髪型など身だしなみにも気を配れ，また人の気持ちを察することができるという，これまで女性の領域とされてきたものも共に兼ね備えた，いわば両性具有型の者だと言えるであろう。

そして，その影響を受けてか，現実自己と理想自己のギャップである性役割葛藤は，男性性・女性性・全体のいずれにおいても，男子の方が女子よりも大きい。しかし，この男子の葛藤の強さを，単に男子は理想が高いと結論するのは早計であろう。男子は自己への強い意識・こだわりがあり，それゆえ現実自己の評定基準が厳しくなったとも考えられる。あるいはむしろ逆に，女子の方が高い理想を抱けなくなっている可能性もある。いずれにせよ，現代の大学生においては，男子の方が性役割の理想と現実のギャップに苦しみ，そしてその葛藤が自尊心を低下させているのである。また男子の場合，理想自己として女性性を重視している者ほど自尊心が低くなっている。男子は，女性性を高く望むことにまだ何らかの抵抗があるのだろうか。「男とはこうあるべき」という世間の目が，知らず知らずのうちに圧力となっている可能性もある。実際，父親から自主・独立を強く促されていると認識している者ほど，現実自己における女性性は低い。

ところで，この両親の養育態度への認識内容も自尊心に影響を与える要因のひとつであった。男子は母親のみ，女子は両親ともに関連があったが，いずれも自主・独立を強く促されたと認識している者ほど自尊心が高い。やはり，幼い頃から心理的自立を促されたり，行動の自由を与えられたりといった，他者から一個人として認められる経験をすることが，自己を価値ある者として受け入れられる自尊心の高さに結びついているのだろう。また今回の調査は子ども側から見た両親の養育態度への認識であったが，この結果は小児期に自立的行動の妨害や幼児扱いをし，何かと過保護に育ててしまうと，その後の子どもの自尊心までをも低下させてしまう危険性があることを示唆していると思われる。

さて，これまでの多くの先行研究では，男子の自尊心が女子より高いという結果が得られていたが（蘭，1985他），今回は有意な性差は見られなかった。その点については，調査時期が20年近く前であるなどいくつかの理由が考えられるが，本研究においては被験者が現役の大学生であったことが大きな違いとしてあげられるだろう。大学生ということは，少なくとも大学受験に合格して現在に至っており，そのことがある程度その個人の自信となり，男女の自尊心の差をなくしているものと思われる。それに大学では，男女に関係なく同じ課題を与えられ，みな同じカリキュラムをこなしている。高校までとは違い男女別のグループ分けや指示もほとんど見られなくなる中で，日常生活において男子・女子という

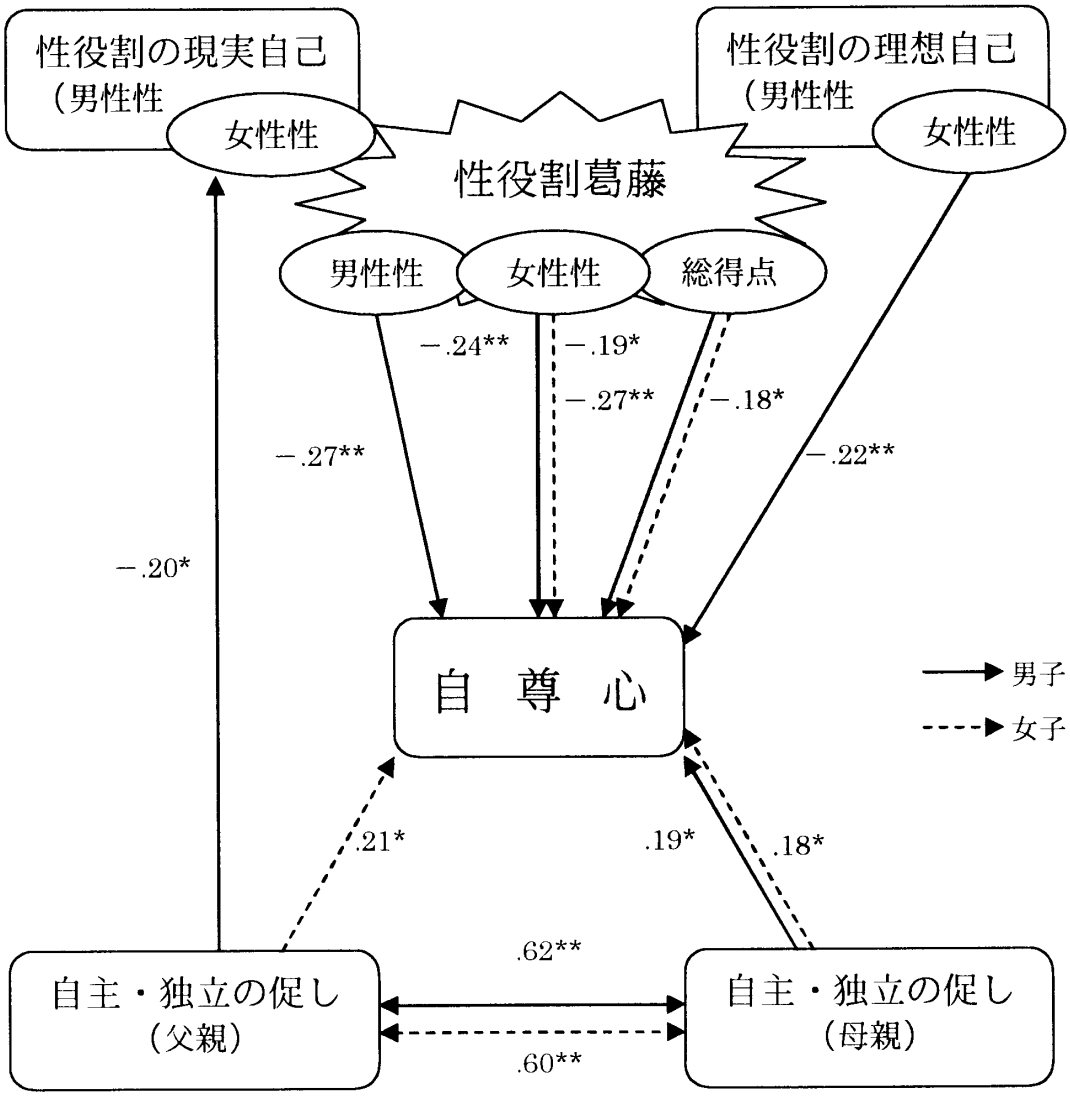



図4　自尊心に影響を与える諸要因間の相関関係

性別を特に意識することがなくなるのかもしれない。また，性役割タイプ別の分析でも，自尊心に有意な差は見られなかった。本研究では，自身を「これでよい」という自分なりの満足感を感じる程度のことを自尊感情として測定したが，能力的自信や社会的適応・不適応感などの要素を含め，自尊心をさらに多角的に見ていく必要があるのかもしれない。

最後に，これまでは根強い伝統的性役割が多くの女性を苦しめていると認識していたが，こうして全体的な結果を見てみると，むしろ大学生では男子の方が，性役割をめぐって変わる現実とまだまだ変わらない「世間の目」の狭間で多くの葛藤を抱えていることが浮き彫りになった。最近のリストラの嵐，ここ数年急激に増加している中高年男性の過労死や自殺の報道は，若者に男性ももはや仕事だけでは生きていけない現実を投げかけているのかもしれない。女性のみならず男性にも「仕事も家庭も」が求められる今の時代，男女がそれぞれステレオタイプ的な「男らしく」「女らしく」という呪縛から解放され，「自分らしく」生きるためには，これから先も様々な苦悩を乗り越えていかなければならないだろう。

特に，今回明らかになった男子の葛藤については，さらに詳細な検討を重ねていく必要がある。また調査対象に関しても，本研究では現役の大学生に限定して行ったが，同じ年代でも高卒ですでに社会人として働いている者とはおそらく性役割観や自尊心が

異なると考えられる。今後は，そのような学歴差も視野に入れた検討をし，さらに研究を深めていく必要があるだろう。

## 文　献


相良順子　2000　児童期の性役割態度の発達－柔軟性の観点から－　教育心理学研究，48，174-181.

蘭　千壽　1992　セルフ・エスティームの形成と学校の影響　遠藤辰雄・井上祥治・蘭　千壽（編）セルフ・エスティームの心理学：自己価値の探求　ナカニシヤ出版　pp.178-199.

Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of consulting and clinical Psychology*, 42, 155-162.

Bem, S.L. 1975 Sex role adaptability: One consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643.

土肥伊都子　1995　ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ－母性・父性との因子分析を加えて－　社会心理学研究，11，84-93.

土肥伊都子　1996　ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成　教育心理学研究，44，187-194.

遠藤久美・橋本　宰　1998　性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について　教育心理学研究，46，86-94.

遠藤由美　1992　自己認知と自己評価の関係－重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討－　教育心理学研究，40，157-163.

堀田美保　1996　「男であること」・「女であること」の有利性に関する内集団・外集団意見分布の推定　社会心理学研究，12，77-85.

堀田美保　1998　性役割分担に関する社会における一般的意見の分布－大学生による推定－　教育心理学研究，46，221-228.

井上祥治　1992　セルフ・エスティームの測定法とその応用　遠藤辰雄・井上祥治・蘭　千壽（編）セルフ・エスティームの心理学：自己価値の探求　ナカニシヤ出版　pp.26-36.

伊藤公雄　2003　「男らしさ」という神話　NHK人間講座，8－9月期.

伊藤美奈子　1992　自己受容を規定する理想－現実の差異と自意識についての研究　教育心理学研究，40，164-169.

伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究，26，1-11.

伊藤裕子　1980a　女子青年の性役割観と父母の養育態度－職経歴選択を中心に－　教育心理学研究，28，67-71.

伊藤裕子・秋津慶子　1983　青年期における性役割観および性役割期待の認知　教育心理学研究，31，146-151.

伊藤裕子　1997　高校生における性差観の形成環境と性役割選択－性差観スケール（SGC）作成の試み－　教育心理学研究，45，396-404.

伊藤裕子　1998　高校生のジェンダーをめぐる意識　教育心理学研究，46，247-254.

伊藤裕子　2001　青年期女子の性同一性の発達－自尊感情，身体満足度との関連から－　教育心理学研究，49，458-468.

柏木恵子　1973　現代青年の性役割の習得　依田新（編）現代青年心理学講座第5巻　現代青年の性意識　金子書房　pp.101-139.

柏木恵子・高橋恵子（編）1995　発達心理学とフェミニズム　ミネルヴァ書房.

柏木恵子・高橋恵子（編）2003　心理学とジェンダー：学習と研究のために　有斐閣.

木村涼子　1999　学校文化とジェンダー　勁草書房.

小出　寧　1999　ジェンダー・パーソナリティー・スケールの作成　実験社会心理学研究，39，1，41-52.

水間玲子　1998　理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について　教育心理学研究，46，131-141.

森永康子　2002　女らしさ・男らしさ：ジェンダーを考える　北大路書房.

成田智拓・佐藤哲哉・平野茂樹・西岡和郎・坂戸薫・上原　徹・伊藤哲彦・笠原　嘉　1998　Parental Bonding Instrument（PBI）によって測定された両親の養育行動の因子構造　季刊　精神科診断学，9(2) 263-277.

小川雅美　1991　PBI（Parental Bonding Instrument）日本語版の信頼性，妥当性に関する研究　精神科治療学，6(10) 1193-1201.

佐藤章子・斎藤悦子　1994　性役割道程と自尊感情との関連性(1)　日本心理学会第58回大会発表論文集，p.32.

総務省統計局　2002　社会生活基本調査トピックス　夫と妻の仕事・家事時間，http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/topics/tps0211.htm.

伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究，26，1-11.

総理府　2000　男女共同参画社会に関する世論調査，http://www8.cao.go.jp/survey/h11/danjyo/images/zu11.gif.

戸田和子・堅田弥生　1987　性役割受容の意識構造と，その習得過程に関わる父母・他人の効果　心理学研究，58，309-317.

徳田完二　1987　青年期における自己評価と両親の養育態度　心理学研究，58，8-13.

渡邊恵子　1992　自立と自己の性の受容(2)ー性差の検討ー　日本女子大学紀要　人間社会学部，3，1-14.

渡邊恵子　1996　青年期後期における性役割の認知と自尊心　日本女子大学紀要　人間社会学部，6，145-159.

渡辺恵子　1997　青年期後期における性役割：大学生の対人場面における性役割行動・性役割観・性役割受容の性差　日本女子大学紀要　人間社会学部，7，89-100.

渡邊恵子　1998　女性・男性の発達　柏木恵子（編）結婚・家族の心理学　ミネルヴァ書房　pp.233-292.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，30，64-68.